

たからもの

カワズ

昔から妄想が激しいたちだった。妄想というのか想像というのか、そこら辺はよく分からないけれど、まあどちらも似たような類だろう。つまり癖みたいなものなのだ。ぬいぐるみを動かしてアテレコしてみたり、妄想を文章にすることが。そういう昔からの習慣が癖になってしまい、未だそこから抜け出せていない。ハタチを越えて何やってるんだ？時々自分にそう問いかけてみるのだが、なんせそれがルーチンワークみたいになっているのでどうしようもないのだ。それがストレス発散になっているし、それをしないとイライラする。たちが悪い、と思う。大体、そういう人間を世間はおかしいと思うらしいのだ。世間はすごいスピードで過ぎていくけれど、そのスピードにもついていけない自分がある。フツの基準に合わせることは出来る。そんなのは簡単だ、フツの振りをすればいい。雑誌の話とかテレビの話とか、あと好きな服装の話なんかをすればいい。なんなら数字の話でもいいだろう。どっかのデカイ土地の話とか、金のお話をすればいい。そんなことで時間は過ぎていくし今日という日を簡単に終わらせることが出来る。簡単だ。だけどそれが楽しいかと言われればそうじゃない。そうじゃないから困っているのだ。しかしぬいぐるみを使って話す人間についていける人は、一体どれほどいるだろう。しかもハタチを越えた人間がそんなことをしているのだから、まあ大体の人は引くはずだ。なにをやっているんだ！と思うかもしれない。妄想のお話をしてみても一緒だろう。もし本当にお金に羽が生えていたらとか、もし嘘つきな人間が実は全員二枚舌だったらとか、そういったことを話したところで「この妄想癖め」とほとんどの人が顔を歪めるに違いない。少なくとも、私の周りにはいる大多数の人間はそうだった。だからフツのお話をした。昨日食べたご飯の話、今日聴いた音楽の話。そんな話だって楽しいけれど、フツの生活も楽しいけれど、やっぱり何かが違うのだ。そういった気持ちに押しこめられたとき、私は王子さまに会いに行く。王子さまは大体本棚の端っこで隠れんぼをしていて、まるで宝物みたいな顔をしている。たくさんある本の中でも、私にとって王子さまは特別だ。だから私は本棚を見ると少し心が和らぐし、その本棚の中に王子さまがいるのだと思うとワクワクする。そしてどうしても王子さまの笑い声が聞きたくなったら、こうやって本を開くわけだ。そうすると、とても安心する。しかし、はて...おかしいと思われるだろうか、こんな妄想。いや、おかしいならおかしいでいいだろう。フツのお話をすることにする。だから今した話は心の中にしまい込もう。そうすれば、私の心も宝物があるみたいにキラキラするはずだ。きっと、きっと。